

馬渡の眼 7

「お年玉くじ付き年賀はがき」

馬渡 徳子

まもなく、2021 年が、暮れようとしている。

この原稿を記載する時期は、丁度、年賀はがきや、お年賀欠礼はがきを準備する時期にあたる。

かくいう私は、毎年、患者会役員さんで、郵政事業に勤務されている方から、購入してきた。

今年は、昨年の三分の一の数の注文となり、「とうとう SNS 活用に変更ですか？」と訊かれた。

「いえいえ、私は SNS は苦手です。還暦を機に、今年『年賀状を卒業宣言』したの。」と、お応えした。

「そうでしたか。それは、寂しいなあ。20 年以上のお付き合い。馬渡さんが転勤・定年されても、ずっと歴代の患者会役員と担当職員さんからご注文頂いてきました。ノルマが厳しかった時期もありましたから、本当にありがたかったです。」と言われ、過去の皆さんの顔が浮かび、懐かしくなっ

た。

「そうですね。長い間、本当にありがとうございます。来年の元旦は、もしかしたら自分の名前の年賀状がなくて、寂しい思いをするかもですね。けれど、連れ合いと義母はこれからも継続しますので、どうかお達者で、これからも末永く、お付き合い下さいます様に。」と、お応えした。

その後、しばらくの間、「お年玉くじ付き年賀はがきにまつわる思い出話」に、花が咲いた。

2000 年位までは、四肢機能に障がいのある患者会役員さんに代わり、担当職員がパソコンで作成していたが、担当職員でもある作業療法士の提案で、「患者会役員さんによる絵手紙」に変更し、それが大好評だったこと。

また、それが、患者会の枠組みを超えて新たなサークル活動につながったこと。素敵な講師の先生につながり、自治体主催

の文化祭にてのサークル展にも参画した。

この時期辺りには、患者さんの治療法に、世界的なパラダイムシフトがあり、早期に発見し、専門医による治療が叶うと、関節破壊・変形を防げるようになり、患者さん自身が、それまで諦めてこられた日常生活動作や趣味などにも取り組めるようになっていった。このエピソードは、正に、その象徴ともいえる。

会員さんに、一等賞が当たり、その商品が CD ポータブルプレーヤーで、お孫さんにととても喜ばれて嬉しかったこと。毎年三月に早春会の催しがあり、その折に報告を受けた参加者が、あやかりたいと、次々と触ったり、握手を求めておられたっけ。その光景は、本当に微笑ましいものだった。

そうそう、近年の一等賞は、年賀はがき購買減少への対抗策として、金券・目的クーポン券に代わり、選べるようになったらしく、全くもって、縁がなかった。涙。

二等賞のふるさと小包は、結構な確率で当たりが出て、子ども食堂の前身となる地域開放型えがお食堂に、寄付頂いた事で、カレーライスしかメニューがないので、非常に助かった。

三等賞の切手シートは、役員さんの中に、歴代のシートをファイリングして持参された方がおられ、「なんでも鑑定団に出したら、どのくらいの査定が出るかね。」と、勝手に皆でワクワクし、妄想ごっこをしたこともあった。

私は、この患者会の方々に、ソーシャルワーカーとして育てて頂いた。来年三月には、博士前期課程の論文中間発表。六月末には、論文提出→最終審査を迎える。四年間は、本当にあっという間だ。

そうだ！ 今年からは、毎年、自分に宛てた年賀はがきを一枚書こう！！

「 やあ、あけましておめでとう。

大丈夫。

秋には、無事に患者会の皆さんに論文をお渡しできているよ。

謙虚に。真摯に。おもしろがって。 」

皆様にも、どうぞ、ごきげんよう。

世界中の人々に、良いお年を。